

コロナ禍の時代を生きる

島之内教会牧師 木戸 定

2020年8月21日(金)早朝、清水坂を上ろうとした時、足元の草むらから虫の声が聞こえてきました。そういえば、昨日までうるさかった蝉の声が聞こえません。コロナ禍の中、猛暑に苦しめられながらも、確実に時は流れ、秋は近づいているのだと思いました。

島之内教会がある東心斎橋から南に向かって歩くと、まず最初に出会うのが天王寺七坂の一つ真言坂。源聖寺坂、口縄坂、愛染坂を過ぎて、つぎにあるのが清水坂です。それを越えると天神坂、逢坂となり大阪の歴史を感じながら朝の散歩を楽しむことができます。

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角かどが立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。

これは、夏目漱石の『草枕』の冒頭の言葉ですが、自分の心のなかには、どんな想いが湧き上がって来るのか楽しみにしながら、一つひとつの坂を上り下りしました。

わたしに聞け、ヤコブの家よ
イスラエルの家の残りの者よ、共に。
あなたたちは生まれた時から負われ
胎を出た時から担われてきた。
同じように、わたしはあなたたちを老いる日まで
白髪になるまで、背負って行こう。
わたしはあなたたちを造った。
わたしが担い、背負い、救い出す。

早朝とはいえ30度を越える大阪の夏です。約1万歩の道のりを踏破して、ここまで来ると汗びっしょりになります。まだまだ自分はこれくらいは歩けるのだと言う自信と同時に、健康で元気に日々生きることが出来ている、今の自分があるのは多くの人々に支えられ、助けられ、与えられているからだと言う想いが湧き上がってきて胸が熱くなりました。そして、ふと、イザヤ書46章3節から4節のみ言葉が思い出されました。幾度も上ってきた人生の坂道を汗をかきながら私を背負ってくださった方々の顔が浮かんで来ました。

数日前には、西原勇牧師の時代から70年近く島之内教会と共にずっと歩いて来られたY姉妹を病院にお見舞いに伺いました。コロナ禍、緩和ケア病棟に入院されている方と面会できること自体が奇跡的なことでした。意識は、はっきりされていてお会いできたことを喜び合うことが出来ました。お祈りをして退室しようとした時、「私も祈らせて下さい」と言ってお祈りしてくださいました。明瞭な言葉で、しかし言葉を探しながらゆっくりと、時間をかけてお祈り下さいました。これまで、こんなふうに教会のため、教会員のために祈り、島之内教会を支え、守って来られたのだと思いました。Yさんのそんなお姿を心にしっかりと刻ませていただきました。

コロナ禍の時代、多くの方々が厳しい状況に置かれています。教会も例外ではありません。しかし、私たち一人ひとりに出来ることはたくさんあります。それは、一瞬一瞬神のみ心がどこにあるのか尋ね求めつつ一つひとつの選択をしてゆくと言うことです。人生は、選択の連なりです。欲得で選択すれば必ずしっぺ返しがあります。繁栄即滅亡の運命を免れることは出来ません。問題を誰かのせいにして、その人を批判しても、それは自分には問題解決能力がないことを言い表しているようなものです。「祈っていれば誰かが何とかしてくれる、神様がきっと良いようにしてくださる」と言うのも無責任な話です。ましてや不安に怯え、引きこもってしまったら、新しい未来をひらくことは出来ません。

神様は、私たちに「願い」を抱く力を与えてくださいました。そして、その「願い」を基に人生を自由に創造する力をも与えてくださいました。この力を充分に発揮して、力の限りを尽くして歩み続けること、そして、あとは神様のみ手に委ねること、それが今、私たちに出来ることではないでしょうか。

人生は上り坂下り坂だけではありません。「まさか」もあります。その「まさか」と言う厳しい時代を私たちは生きています。

イザヤ書41章10節に、つぎのような御言葉があります。

恐れることはない。わたしはあなたと共にいる神。

たじろぐな、わたしはあなたの神。

勢いを与えてあなたを助け

わたしの救いの右の手であなたを支える。

神様の救いの御手は、誰にも差し伸べられています。その右の手をしっかり握り返して神様と共に歩むのも、払いのけるのも私たちである、と言うことです。一日一日、月々、年々、神様の御心の体現者として歩むことができるように努めてまいりたいと願うものです。